

こどもと地図 6年

地図 with 歴史の舞台

ペリー上陸地

1853～54年に開国を求めて来日したペリー艦隊は、那覇、父島、久里浜、横浜、下田、函館に上陸したことが知られています。地図帳に記載されているペリー上陸地をたどり、実際にどこで何が起こったのか想像を膨らませてみましょう。



ペリー上陸記念碑(浦賀市)〈PIXTA〉



ペリー艦隊の久里浜上陸(ハイネ原画・石版画)
(横浜開港資料館所蔵)



ペリー艦隊来航記念碑(下田市)〈PIXTA〉



地図帳p.31(那覇市)



地図帳p.59
(横須賀市)



地図帳p.58(下田市)

1853年、ペリーが4隻の軍艦を率いて来航したのが神奈川県浦賀沖です。浦賀は、当時の江戸湾の入り口にあたる場所。当時の様子は、ペリーに同行した画家ハイネによって、公式報告書の挿絵にも描かれています。現在、この地にはペリー上陸記念碑や記念館などを有するペリー公園が整備され、松の木の向こうに久里浜の海が広がる穏やかな景観が楽しめます。

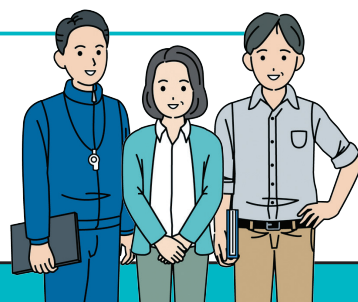
翌1854年、ペリーが2度目の来日で上陸を果たしたのが横浜でした。軍艦は7隻に増え、1度目の浦賀よりも江戸湾に深く入り込んでいたため、幕府を慌てさせました。その後、日米和親条約に基づき、開港の地に選ばれたのが下田でした。下田港が選ばれたのは、薪や食料を補給しやすく、船が立ち寄りやすいという

理由でした。地図を見ると、下田が浦賀や横浜に比べて寄港しやすい外洋に面していること、また江戸から離れているため、幕府も安心だったであろうことがわかります。下田にも、ペリー艦隊上陸地点に記念碑が設置されています。ちなみに、ペリー艦隊は一度目の浦賀来航の前に沖縄に立ち寄り、那覇市にも記念碑が残されています。

浦賀のペリー上陸地については、地図帳のp.102にも記載があり、日本の歴史の舞台を地図上で確認できます。さらに帝国書院Webサイトの会員限定コンテンツには、ペリーの全航海ルートを記したポスターも用意しているので、ぜひご活用ください(ポスターについては本誌裏面で詳しく紹介しています)。

6年担当の先生で
ご回覧ください。

--	--	--	--	--	--



明治の産業革命遺産を地図で確認することで、産業革命が日本の「どこ」で起こったのか、現在どうつながっているのか空間的な広がりの中で捉え直すことができます。

地図帳で「明治日本の産業革命遺産」を探してみよう

●鹿児島県 鹿児島市立向陽小学校 教諭 西原真琴

問い

日本の近代化の舞台である「明治日本の産業革命遺産」は、どの地方に多く見られるのだろうか。



デジタル地図帳の九州地方。レイヤー機能で歴史・文化を選択して表示できる

1

単元「明治の国づくりを進めた人々」で地図帳を使ってみよう

「明治の国づくりを進めた人々」の単元では、富国強兵や殖産興業といった明治政府の改革を学び、日本の近代化を理解させます。しかし、改革を文字だけで追うと児童は実感を伴いにくいものです。そこで有効なのが、地図帳の活用です。改革が「どこ」で行われ、現代にどうつながっているかを視覚的に捉えさせることで、歴史を自分事として捉える主体的な学びが始まります。

2

「明治日本の産業革命遺産」はどこに多く集まっている？

授業では、殖産興業の具体例として、各地に残る世界文化遺産の「明治日本の産業革命遺産」を取り上げます。まず地図帳p.15の凡例から「世界文化遺産」の記号を確認させ、全国から探す活動を行います。

見つけるのが難しい児童には、「岩手県の釜石や静岡県伊豆半島を見てごらん」と具体的な地域を指して声をかけます。ピンポイントが合ってきたらペアで教え合わせることで、意欲的に探し出せます。



地図帳で世界文化遺産を探す児童

遺産の点在に気付かせた後、「特にどこに集まっている？」と問いかけると、児童は九州地方への集中に驚くはずです。すかさず九州のページ（p.33～34）を開かせ、例えば鹿児島市の「旧集成館ほか」の文字と記号を自分の指で押さえさせます。

確認の際に効果的なのがデジタル地図帳のレイヤー機能です。国道や都市名など不要な背景情報を隠し、世界遺産のマークだけを浮き立たせます（左ページ参照）。さらにデジタル地図帳で各地方のページを開き、ペン機能で産業革命遺産（釜石、蕨山、九州各地）を囲んで焦点化することで、遺産の偏りや分布の傾向をすべての児童が直感的に捉えられます。

※令和5年度検定済『楽しく学ぶ 小学生の地図帳』p.127では日本全体の世界遺産の地図を用意している。



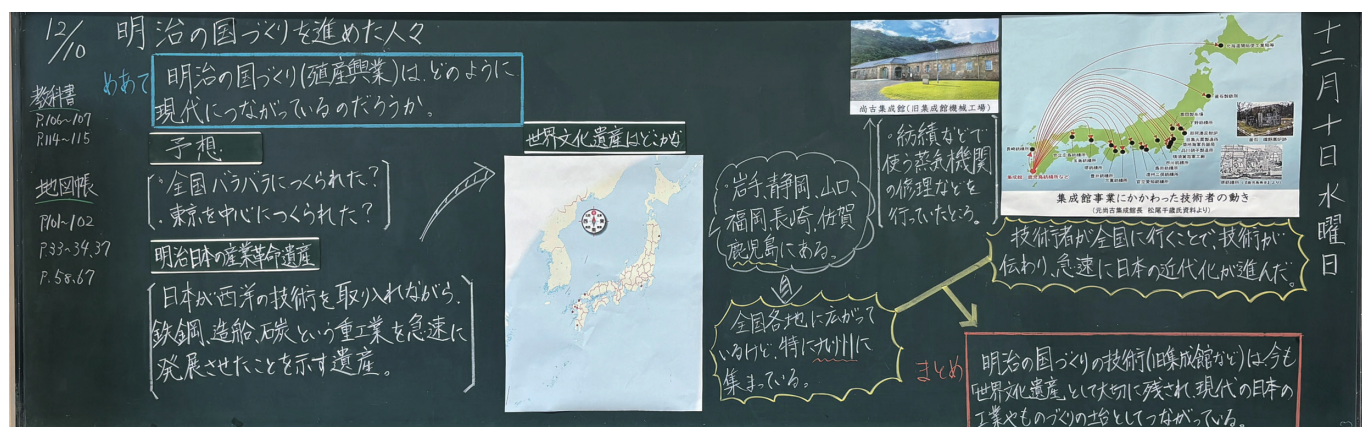
デジタル地図帳p.33～34で、世界文化遺産「明治日本の産業革命遺産」をペン機能で囲んだもの

3

歴史学習で地図帳を活用する意義

九州のなかでも、鹿児島市にある「旧集成館」に着目します。ここには大砲を造る反射炉や紡績工場が集中していました。集成館事業は近代産業の苗床であり、ここで育った日本人技術者たちが、のちに富岡製糸場など全国の官営工場へと派遣されて指導的役割を果たしました（元尚古集成館館長・松尾千歳氏の考証による）。ここで歴史的史実（過去）を整理した後、授業のラスト5分で教師がこう問いかけます。「では、この明治時代の工場や高い技術は、役目を終えてただ壊されて終わりだったのかな？ なぜ、今私たちが持っている“現代の地図帳”に、わざわざ世界遺産マークで載っているのだろうか？」。この問いかけが、児童の思考を過去から現代へとジャンプさせます。「今の日本の優れた工業や、ものづくりの始まりだからだ」「今も大切なものとして残されているからだ」と、児童は現代へのつながりを自分の言葉で語り始めます。

歴史学習において地図帳を活用する意義は、過去の歴史的事象を「空間的な広がり」のなかで捉え直せる点にあります。日本が近代国家を目指して歩みを進めたダイナミズムを、地域間のつながりや空間の軸を通して実感させることができるのです。



授業での板書

本記事はアプリ「帝国書院」に掲載した内容に加筆したものです。

アプリ「帝国書院」*では他にもたくさんの地図帳活用例を紹介しています！

*あらかじめ「帝国書院」Webサイトに会員登録が必要です。



帝国書院

アプリ
ダウンロードは
こちらから

App Store



Google Play



今日から使える!

デジタルコンテンツ

帝国書院Webサイト

会員限定コンテンツで ペリー来航の謎に迫る

ペリーが大西洋まわりで来航した理由とは？

歴史なぞ解き地図
ペリー来航は
こちらから



当時の
アメリカの
状況を解説

当時の
日本の
状況を解説

考察の
ヒントとなる
なぞ解きのカギを
紹介

ペリーが来航した
経緯を解説

帝国書院
Webサイト
会員登録は
こちらから



帝国書院Webサイトでは、授業づくりに役立つワークシートや資料などの会員限定コンテンツを多数掲載しています。例えば、「6年 明治の新しい国づくり」の単元で活用できる「歴史なぞ解き地図 ペリー来航」。イラストと世界地図を見ながら、「なぜペリーは、大西洋まわりで7か月かけて日本に来たのだろうか?」という学習課題について、当時の世界情勢をふまえながら学ぶことができます。まずは地図上でペリーがたどった航

路を確認し、地図の左右にあるアメリカ合衆国と日本の状況を見てみましょう。そのうえで、下にあるペリー来航の経緯を理解させます。右下にある「ペリーは日本を開国させるためにどのような作戦を考えたのかな?」などの「なぞ解きのカギ」に従って考えることで、ペリーが来航した事実だけでなく、その背景を広い視野でとらえられます。地図とイラストを使った解説により、臨場感をもって歴史を学ぶことができるでしょう。

わくわく授業づくり! こどもと地図 6年 2026年度後期号
2026年8月20日発行 (No.75) ©Teikoku-Shoin Co.,Ltd.2026

発行所 東京都千代田区
神田神保町3-29 (〒101-0051)
株式会社帝国書院

発行人 守屋 智央
電話 03-3262-4795 (代)
<https://www.teikokushoin.co.jp/>

本誌に掲載している地図帳は、平成31年検定済『楽しく学ぶ 小学生の地図帳』です。

(QRコード使用上の注意) QRコードを読み取って表示されたサイトにアクセスした際には、別途通信料がかかる場合があります。

(本誌掲載の他社商標について)

・QRコードは、株式会社デンソーウェーブの商標または登録商標です。・その他の会社名および製品名・ロゴマークは各社の商号、商標または登録商標です。

『わくわく授業づくり! こどもと地図』は
Webサイトからも読むことができます。

こどもと地図についてのご意見・ご感想はこちらまで



教授用資料